

礼拝 2020年4月5日(日)

題 『子ろばに乗って』

テキスト：マタイによる福音書21章1～11節

(聖書の文は最後に記しています。)

いよいよ私たちは受難週を迎えました。今週一日一日主イエスの十字架に至る受難の姿を心に覚えて過ごしたいものです。今日の聖書の箇所は、主イエスが「エルサレム入城」と言われます。このエルサレムでイエスは時の権力者と論争され、捕えられ十字架に処刑されたのです。そして、3日目に復活したと聖書は伝えています。マルコによる福音書による、この受難週一週間の聖書箇所を記したものを受け付けにしていますのでお持ち帰りくださり、ぜひ今週お読みください。

さてイエスはエルサレムに入城するに際して、ろばの子を用いられました。二人の弟子を近くの村に使いに出して、つながれているろばをといて、用いられたのです。イエスは弟子たちを良く二人ずつ用事に用いられます。もし、誰かが何か言ったら、「主がお入り用なのです」という言うように告げられ、弟子がイエスのいう通りに実行するとロバの所有者は渡してくれたのです。私たちも、このロバのように、イエスさまに、神さまに用いられているのではないのでしょうか。主がお入り用なのです。

ご存じの方も多いと思うのですが、この箇所を読むと淡路島出身のわたしの大学の先輩にもあたる榎本康郎牧師のことを思い出すのです。自分をイエスさまを乗せるちいさなろばであるとみなされ、多くの人に良い影響をあたえ、伝道者としての生涯を駆け抜けられました。先生の壮絶な生涯は、小説家の三浦綾子女史の「ちいろば先生物語」として残されました。わたしも20代の頃、榎本先生の自伝と言える、「ちいろば」を読んで感動した一人です。

ところで、何故イエスはエルサレム入城に際して「子ろば」に乗られたのでしょうか。このことは、旧約聖書の実現を表しているのです。5節：ゼカリヤ9：9(P1489)の予言を主イエスは実現されているのです。

古代では王を始め権力ある者は馬を良く利用しました。しかし、イエスは戦いを表す馬に乗るのではなく、ろば、それも「子ろば」に乗られたのでした。ゼカリヤ書の記述は、本来紀元前333年にギリシャのアレキサンダー大王がペルシャ帝国を敗った時(昨年アレクサンダー大王の映画があります。)、イスラエルの人々が彼を解放者とたたえて歌った歌でとされていますが、救い主・

メシアは、アレキサンダー大王のように、馬や戦車によって、つまり軍事力によって平和をもたらす方ではなく、「ろば」が意味する柔和の方向によって地上に平和をもたらす方なのだ、ということなのです。ろばは、馬があらわす力、軍事力ではなく、抑圧や武力とは無縁の存在なのです。

現在型ウィルス感染拡大状況の中で、「ウィルスに戦って勝つ」と息巻いて、外を出歩く人たちもいるようです。でも人類はウィルスには戦って勝つことはできないと思います。むしろ戦う人をウィルスは喜んで飛び込んで来ると考えられます。今は、自分がウィルスに感染していると思って、ウィルスを運ばない事に専念する時だと言われます。そうだと思います。私は、ウィルスを通して、人類は神さまからの警告を受けているように思えるのです。謙虚になること、医療体制を整える事、薬が一日も早くできる事。今後益々、世界が共に協力しあうことが重要です。自国第一主義は、ウィルスには通用しないのです。

イエスが、子ろばに乗ってエルサレムに入ったということは、当時馬に乗っていたような地上の王に代表される権力による道ではなく、それとは異なる道をイエスは、天と地を造られた神の心と見ておられたということです。それは、権力による支配で実現する秩序ではなく互いに仕え合い、助け合い、ろばのように、重荷を担い合うことにより実現する秩序なのです。しかし、イエスの弟子たちの中には、イエスに地上の王のような存在でいて欲しいという期待がありました。この期待が裏切られた時、それまでイエスさまに従っていた人たちは、ついに弟子たちまでもイエスのもとを離れていったのです。聖書によれば、大勢の群衆が王様を迎える姿勢で、自分たちの着ていた服を道に敷き、木の枝、棕櫚の枝、実際はなつめやしの枝のようですが、枝を道に敷いて「ホサナ」と言ってイエスを迎えました。9節。この「ホサナ」という言葉は、ヘブライ語で「どうぞ救ってください」という意味ですが、後に「歓呼を表す言葉」（喜びを表現する言葉）、日本語で置き換えれば「バンザイ」とでもいう意味、として使用されました。イエスを「ホサナ」と言って迎えた人々が、イエスが捕えられた時、期待が裏切られた時、今度は「イエスを十字架につけよ」と叫んだのです。その極致がイエスさまの受けられた十字架なのです。十字架の苦しみなのです。神の御子は暗闇と絶望のただ中にまで来てくださったのです。

主イエスは、一切の権力を求めない生き方を実行されました。キリストにつながる者たち、わたしの内、わたしたちの内にも、気づいていなくても「わたしが、わたしが」という思いはあるのです。この権力志向の心と日々格闘し、己の心が解放されなければなりません。ただ自分の力で格闘するのではなく、神の力、御霊の慰めと助けをいただいて祈りつつ格闘するのです。

主イエスは、権力による支配に対して、まったく反対の道を歩まれました。それが、十字架への道です。神の意思の実現はこれしかない信じて歩まれたのです。このイエスに、神は復活のいのちを備えておられ、究極的に全世界を愛をもって支配する治める権威を与えておられるのだと聖書は語っているのです。ですから、イエスにつながる者たちは、世界がどんなに混乱していても、不正や悪がはびこったかに見えてもあわてふためいたり、あきらめたりする必要はないのです。主イエスと神によりすがって、祈りを捧げ、愛の業に励んで行けばよいのです。最後の勝利は主イエスにあるのだということが、キリスト者の希望なのです。神さまは、やがてすべてを正しくお裁きになるのです。

最近「人は、神と人とを真に和解される仲裁者に出会うまでは、自己の罪を心底から認めることはできない。」と教えてくれた方がいます。自分を振り返って「そうだな～」と思わされたのです。わたしたちは、愛なるイエスさまを知ってこそ、自分の罪の姿も分からせてもらえるのです。そして自分を縛るさまざまの力、たとえ死の力からからも解放されていることを知ることができたのです。人は愛されて、受け入れられて、自分の罪を、的をはずしていることを知っていけるのだと思うのです。

「子ろば」に乗ったイエスさまは、子ろばの視線に自らを合わせ、子ろばと共に、「小さな者」「悲しむ者」「孤独な人に寄り添うという生き方を実行していたのです。

なぜなら、それが天と地を創られた神さまの心だからです。イエスさまの愛を知った私たちもイエスさまを回りの人たちに謙虚に勇気をもって伝えて行きたいと願うのです。

◆エルサレムに迎えられる

- 1:一行がエルサレムに近づいて、オリーブ山沿いのベトファゲに来たとき、イエスは二人の弟子を使いに出そうとして、
- 2:言われた。「向こうの村へ行きなさい。するとすぐ、ろばが見つかり、一緒に子ろばのいるのが見つかる。それをほどいて、わたしのところに引いて来なさい。
- 3:もし、だれかが何か言ったら、『主がお入り用なのです』と言いなさい。すぐ渡してくれる。」
- 4:それは、預言者を通して言われていたことが実現するためであった。
- 5:「シオンの娘に告げよ。『見よ、お前の王がお前のところにおいでになる、／柔和な方で、ろばに乗り、／荷を負うろばの子、子ろばに乗って。』」

- 6:弟子たちは行って、イエスが命じられたとおりにし、
- 7:ろばと子ろばを引いて来て、その上に服をかけると、イエスはそれにお乗りになった。
- 8:大勢の群衆が自分の服を道に敷き、また、ほかの人々は木の枝を切って道に敷いた。
- 9:そして群衆は、イエスの前を行く者も後に従う者も叫んだ。「ダビデの子にホサナ。主の名によって来られる方に、祝福があるように。いと高きところにホサナ。」
- 10:イエスがエルサレムに入られると、都中の者が、「いったい、これはどういう人だ」と言って騒いだ。
- 11:そこで群衆は、「この方は、ガリラヤのナザレから出た預言者イエスだ」と言った。